

セルフアドボカシーと自己理解

テーマトピック

【高等学校における特別支援教育】

令和5年12月号

障害のある子どもが主体的に自分の力を発揮していくことを目的に、環境調整等の合理的配慮が学校現場でも行われています。高等学校における支援を考えていく上で、学校として行う環境調整等の合理的配慮はあっても、本人の自己理解や障害受容、そこから周りに支援を求めていく力がなければ、その支援が適切なものとして成り立たないことがあるかもしれません。さらに、将来、大学や職場において、自分に合った支援を周囲に求めたり働きかけたりする力が必要になってきます。もう高校生だからと、自然に力がつくことを待つのではなく、その力を本人自身が身につけていくことを支えていくことも高等学校での支援の一つであり、その子の将来を見通す上で重要ではないでしょうか。今回は「セルフアドボカシー」という視点からテーマを掘り下げていきます。

「セルフアドボカシー（自己権利擁護:SA）」とは、自分の権利を自分で守っていくことで、「支援を得て自分らしく生きるために声をあげること」（片岡、2022）とも言われています。「自分一人ですること、周りの支援を得てできることがわかる力」や「何をどのようにしてほしいのかを他者に求められる力」といったセルフアドボカシー・スキルと呼ばれる力をつけることが重要であると考えられています。つまり、自分に必要な支援を自分で求めていくためには、本人が自分自身について理解する必要があります。また、本人にセルフアドボカシー・スキルを身につけさせるだけでなく、それを受け止める側（教師・大人や友人等）の理解も必要不可欠といえます。

本人も受け止める側も「できないこと」ばかりに目を向けるのではなく、その先にある「できなくても支援があればできること」から「主体的に生きること」へつながるようなセルフアドボカシー・スキルが身につくように、まずは自己理解につながる支援から始めてみてはいかがでしょうか。

セルフアドボカシー・スキルの獲得に向けて（自己理解のために）

当事者

- ◆自分の強み（自慢できるところ）を見つける。
- ◇自分が苦手なことや弱さと向き合う。
- ◇どんなことに困っているかわかる。
- ◆どんな状態になりたいのか理解する。
- ◆何をどう支援してもらったらできるのかという方法を知る。
- ◇自分で伝える。

支援者

- ◆できることをほめる。
（第三者にほめられることで「できる自分」を実感したり、新たな自分の発見に繋がる）
- ◇支援があることは悪いことではないこと、メリットを伝える。
- ◇自尊感情を高める指導をする。※1
- ◆支援が求めやすい人的・物的環境を整備する。
- ◇支援を得てうまくいった成功体験を積めるようにする。

信頼関係 ※2

※1

自尊感情を高める

うまくいかなかった体験の積み重ね
全体的な否定感 意欲の低下

成功体験を重ねる

「失敗しても大丈夫」
「助けがあったら自分でできる」

※2

信頼関係を築く

「弱さや苦手を他人に見せたくない」

受容的態度
共感
傾聴

安心感

「弱さを見せても大丈夫」
「受け止めてもらえる」

信頼感

〈参考文献〉

片岡美華. 自分の権利を守るために「セルフアドボカシー」の力を育てる. 月刊「実践みんなの特別支援教育」. 2022.5. P10-11

片岡美華・小島道生. 『事例で学ぶ発達障害者のセルフアドボカシー「合理的配慮」の時代をたくましく生きるための理論と実践』. 金子書房. 2017.9